

持続可能な地域づくりのための「対話」の可能性 ～「2030松崎ゴールズ」策定プロセスにおける「対話」～

“Dialogue” for Building Sustainable Local Community from the Process of Making “2030 Matsuzaki Goals”

吉田寛
Hiroshi YOSHIDA

スーター・レイ
Rae SUTER
静岡大学情報学部

中野玄
Gen NAKANO

Shizuoka Univ. Faculty of Informatics

論文概要：近年、社会づくりの方法として注目されている「対話」について、筆者らがメンバーとして参加している持続可能な地域づくりプロジェクト（2030松崎プロジェクト）への参与的な観察と分析に基づいて、その可能性と課題を提示する。まず、「対話」を他の発話や合意形成の方法と区別しつつ、その特徴を確認する。また、「対話」の意義についての言説を思想史的に俯瞰した上で、現代社会における「対話」への社会的期待について確認しておく。これを踏まえて、「2030松崎プロジェクト」における2020年度後半から2021年度頭までの対話実践としての7回のワークショップを分析しながら、「地域づくりのための対話の可能性と課題」を抽出する。本稿ではとくに、地域の担い手の思いが「対話」を通して言葉となり、これが受け止められることによって生み出される地域のメンバーたちの持続的な協働の可能性について指摘する。
キーワード：対話、ワークショップ、松崎町、地域連携、地域づくり

Abstract: Recently, much attention has been paid to “dialogue” as a way of building communities. The authors of this paper have sought to make clear the effects of dialogue and the potential it has on the sustainable region building project called The 2030 Matsuzaki Project, in which they participate. First, the characteristics of dialogue and what distinguish it between other forms of communication and consensus building were confirmed. Additionally, the expectations for dialogue in the modern society were confirmed by taking a comprehensive view of the evaluation of dialogue throughout history. Based on the research, the practical use of the dialogue during The 2030 Matsuzaki Project was confirmed and the results were analyzed for its potential and challenges. On this analysis, it will be suggested that the dialogue of community member gives words to their hopes for their own future, and sharing these words make positive cooperation of the local community possible.

Keywords: Dialogue, Workshop, Matsuzaki Village, Partnership, Local Community

はじめに

近年、社会づくり、組織マネジメント、人材育成などの分野で「対話」が注目されている。対話を核とした、あるいは対話を手がかりとした取り組みが各所で提案されている。国際政治においては相互理解や国際協調を目的とした「二国間あるいは多国間対話」¹、政治の領域においては行政による一方的な説明会ではなく市民との相互理解を目的とした「市民対話」²、教育の分野においては「主体的・対話的で深い学び」とされたアクティブ・ラーニングなどの試みにおいて、「対話」が中核に位置づけられている³。

対話は、不毛で消耗的な争いや不理解による軋轢や不調和を収め、深い理解や共感を基盤とした生産的な学びや協働を導くものと期待され

ている⁴。「対話」は、インターネットの言説が影響力を強めるなかでフェイクニュースやポスト・トゥルースが問題となっている昨今、知識や言論への不信の広がりに対して、社会に共感と信頼を築き社会をデザインするための手がかりと言える⁵。こうした事情を受けて、わが国でも「対話」に注目する言説や実践の報告が多く見られるようになってきている。だが、日本社会における地域づくりの実践において、対話がどのような場合にどのような効果を持ち、どのような可能性があるかは十分には明らかになってはいない。

本研究では、最初に「対話」についての理解を整理・確認した上で、「対話」の思想史的な意義づけとこれについての社会的な期待の推移を概観する。こうした「対話」をめぐる言説の

文脈を踏まえ、大学と地域が協働して、「対話」を意識的かつ戦略的に用いて、推進している持続可能な地域づくりプロジェクト（2030 松崎プロジェクト）において、「対話」がどのような役割を果たしたか、その中からどのような可能性と課題が明らかになってきたかを、参与観察的な記述を通じて描き出す。

第一章：「対話」とは何か

演劇家の平田オリザは、作家の井上ひさしの分類を手掛かりにしつつ、「話し言葉」の分類を演劇的な観点から試みている。そして、「会話」や「演説」などのさまざまな発話的な活動の中に「対話」を位置づけている⁶。（図1）

平田の分類は、それぞれの話し言葉の定義というよりも、むしろ、役者が人を演じる際の発話についての基本となる典型的イメージと言うべきものであろう。とはいえ、演劇家ならではの生き生きとしたそれぞれの発話の場面が目に見えようという説明である。平田の分類を手がかりに、「対話」とは何か、隣接する言語的な活動とどのように区別して理解することができるか、確認しておこう。

平田の「話し言葉の地図」（における説明を丸括弧で付して示す）によれば、対話（Dialogue）とは、他者に開かれており（他人）、比較的小数の見知らぬ人同士（不特定少数）が、落ち着いた公共の空間（ロビー）に集まり、そこで自

分自身の言葉（「私は」）で語りあい、相互の共感を生み出す（共感）ような言葉の営み、というイメージで捉えられている。

これに対して、演説（Address）は、広場などで街頭演説する政治家のイメージで、聞く意思の弱い公衆に向かって大声で一方向的に語りかけ、特定の政治的立場に誘導しようとする活動とされる。他方で会話（Conversation）は、演説のように一方向的ではないものの、家族のようにすでに知り合いである閉じた関係、居間のようなプライベートな時空間における、「楽しいおしゃべり」とされる。

この意味で、平田の「対話」は、開かれた活動ではあるものの一方向的な「演説」のような活動とは区別されるが、閉じた時空間でのたんなるプライベートな楽しみを目的とした「会話」でもない。開かれた場所での仲間との共感を目指したより真剣な言葉の交流と理解できるだろう。

図1の平田の分類を離れてさらに整理を推し進めるなら、パブリックな意味合いをもつ真剣な言葉の交流には、「対話」の他にも、「討論」（Argument）、「対論」（Debate）、「議論」（Discussion）といったものがある。これらの活動に共通するのは、パブリック（他者に開かれた活動）でありうるということ、テーマや問いが決まっている、その問いをめぐって真剣に言葉を交わすという点である。こうした活動全体を、一般的

種類	演説	談話	説得・対論	教授・指導	対話	挨拶	会話	反応・叫び	独り言
英語	Address	Speech	Debate	Teaching	Dialogue	Greeting	Conversation	Reflection	Monologue
発話者	政治家	文化人	弁護士	教師	不定	不定	家族	不定	不定
数	単	単	複	単	複	複	複	単	単
相手・数	不特定多数	特定多数	特定少数	特定少数	不特定少数	不定	ごく親しい知人	無し	無し
知紀	他人	他人	知人	知人	知人	不定			
聞く意志	無	中	悪意	強	中	弱	弱		
場所	広場	講演	会議室	教室	ロビー	公園	居間	台所	自室
最初の言葉	紳士淑女諸君	皆さん	私の考えは	これは	私は	こんにちは	あのさー	ギャー	淋しい
長さ	長	長	中	長	中	短	短	短	短
結果	熱狂	理解	納得	習得	共感	親和	確認		寂寥
意識	意識的 ←—————→ 無意識的								

図1 平田オリザによる「話し言葉の地図」

意味で広義に「議論」と呼ぶことができるだろう。

「対話」と、これらの活動との区別についても納富（2020）などを手がかりに整理しておこう。「討論」（Argument）と「対論」（Debate）は、問いに対してどの解答を採用すべきか、主張の勝ち負けを争う活動であり、目的は自説を通し相手の意見を退けることである。「対論」の方が、問いに対して通常、肯定と否定の立場に分かれて決まった手順やルールで意見を戦わせるという形で、より形式的な活動である。これに対して、狭義に捉えられた「議論」（Discussion）は、「勝敗」でなく「真理」を求めてさまざまな意見を出し合い複数で検討するという言語活動であり、典型的にはテーマや問いに対して一つの結論に達することを求めるものである⁷。対話もまた、テーマを共有したうえで真剣に言葉を交わし合う活動であるが、その方向は相互の「理解」や「共感」にあり、必ずしも一つの「結論」や「真理」に到達できなくてもその対話は失敗ということにはならない⁸。ただし、「対話」（Dialogue）といっても、その内実は「討論」（Argument）や「対論」（Debate）に傾くこともあるだろう⁹。

本稿の分析対象である「2030松崎プロジェクト」の中心メンバーでありプロジェクトを思想的にリードする竹之内裕文は、自らの提唱する「死生学カフェ」における「対話」を、「問い」の共有が「公共的な場を拓く」共同的な開かれた探究の活動と位置付けている。そしてこれを、複数の提案や所説を客観的に分析・検証する「議論」、得失や勝敗を求める「討論」、「話題」を共有し相手と交わり親しむ、その意味で閉じた場と言える「会話」から区別している¹⁰。こうした観点から見ると、本稿が問題にしようとする「2030松崎プロジェクト」の「対話」は、「死生学カフェ」において竹之内の提案する「対話」と同一視はできないものの、相当の共通点をもつ試みとなるだろう。ここではひとまず、地域の未来への関心を共有する社会に開かれた¹¹「未

来实现のための対話」と捉えて考察を進めよう。

第二章：対話の意義と対話への期待

地域づくりにおける対話実践の分析をする前に、社会形成における「対話の意義」とされてきたものを思想史的な概観によって確認し、情報化した現代社会において「対話」に寄せられている社会的期待についても現代史的観点から捉え直しておこう。

「対話」（ディアロゴス）は古代ギリシャの時代から注目され、重要な役割が期待されてきた。古代ギリシャの哲学者ソクラテスは対話を通じて哲学を実践したとされる。彼の哲学的対話は、「産婆術」と呼ばれる。それは対話を通じて、いま相手の持っているアイデアを吟味するように仕向け、こうした吟味を通じて、相手をよりよい知に導く活動である。師ソクラテスと市民たちの対話として自らの哲学を「対話編」によって表現したプラトンは、「対話」を、「公共的」（コイノン）で自由な市民に公平に開かれており、「問い」が共有されており、その「問い」に対して互いに思うところを誠実さ（パレーシア）をもって答え、そして聴き受け止めた上でさらに問いを深めるという形で吟味するものと捉えている¹²。

アーレントは、ソクラテスの「産婆術」やむしろその基盤となる古代ギリシャにおける言論を尊重したポリス生活の理念を評価しながら、こうした対話の行われる空間を「公共的空間」（public space）として評価した。アーレントによれば、公共的空間は、開かれた空間であり、人々がそれぞれの属性（what）、すなわち人種や身分、年齢などの「多数性」を容認しながら対等に言葉を交わし、相互に存在（who）を認め合う空間である。そこは、共通の問い（政治的課題）に向き合い、政治的活動とロゴス（理性）に基づく言論が行われる場であり、人々がそこで人間として存在できる「現れの空間」（space of appearance）なのである¹³。こうしたアーレントの「言論」は、人と人の間にあり、相互の

理解を生む言語活動として「対話」の契機を本質的に含むものと理解するべきであろう。公共性（パブリック）をめぐるアーレントの立場は、第二次大戦以降の、マイノリティを含む社会の多数性を承認し、抑圧や暴力を否定しようとする民主主義を支える重要な議論となっている。

ハーバーマスは、アーレントを批判的に継承しながら、「公共空間」を近代市民社会の文脈で捉え直した¹⁴。近代市民社会において、自由な市民たちが集うコーヒーハウス（イギリス）やサロン（フランス）などにおける市民たちの談論（Diskussion）が、ジャーナリズムと民主主義を支える基盤となったと考え¹⁵、こうしたインフォーマルな討論（Debatte）が行われる場のことを「公共圏（Öffentlichkeit）」と呼んだ¹⁶。そこでは、貴族や文化人・知識人だけでなく、多くの中産階級の市民たちが、文学や芸術から経済や政治の話題について、社会的な地位による支配から自由に、いわば対等の立場で談論を楽しんできたとされる。ここでは、もちろんなごやかな挨拶や会話が楽しまれただろうが、「意見」（Opinion）を求めた理性による真剣な批判のやりとり（Kritik）が見られ、こうした中で「市民的公共性」から近代民主主義社会を支える「公論」（public opinion）が形成されたとハーバーマスは指摘している。

ハーバーマスとアーレントの提示したこうしたアイデアは、現代の政治学において期待される「討議」（Diskurs）概念に基づく「熟議民主主義」（Deliberative democracy）の理論的支柱となり¹⁷、また「対話」（Dialogue）を重視する「哲学カフェ」（café philosophique）¹⁸やそれに類した多彩な市民対話の場としての「カフェ」や「ワークショップ」の運動を導くものとなった¹⁹。大まかに言って、「公共性」と「対話」をめぐるアーレントの強調は多数性と他者の存在の承認という方向にあり、これと対比するならハーバーマスの志向は民主的・理性的な合意と社会的統合の方向を向いていると言えるだろう。こうして、「対話」に期待されるものとして、

非常にラフな思想史的スケッチからではあるものの、「真理」（古代）、「承認」（アーレント）、「合意」（ハーバーマス）といった3契機を確認することができた。

さて、インターネット言論がますます強まっている昨今の情報社会において、インターネット上の「公共圏」に対してはより大きな期待が寄せられるようになっている。そこにはさまざまな歴史的な文脈とそれに起因する要因が考えられるが、これについてアメリカにおける公共空間としてのコーヒーハウスの変遷と、近年のインターネットでの投稿に影響されるようになっている政治的言論の分析から確認しておこう。

アメリカにおいてもコーヒーハウスが1700年代から存在していた。コーヒーハウスには新聞がおり、来店者たちの自由な会話が奨励されていた。そこではやはり社会的な階層や職業に関係なく、すべての市民に、とは言っても女性や黒人らを除いてということだが、平等に解放されていた。ニューヨークでは多くのビジネスマンたちがコーヒーハウスに集って情報交換やビジネスの話を交換し合っており、それが今日の「ウォール街」の発祥となったとされている。当時、紅茶が宗主国のイギリスの支配と文化を象徴するものであるのに対して、アメリカのコーヒーハウスは政治権力に従属しない対抗的なコミュニティという意味合いが強かったと考えられる。イギリスやフランスでコーヒーハウス、カフェが市民革命の母体となったように、アメリカでもウォール街のコーヒーハウスなどが独立派の議論の場となったと言われる。

禁酒法（1920年～1933年）時代、そしてそれにつづく第二次世界大戦後にかけて、アメリカのコーヒーハウスはイタリアからの移民によって再び活性化された。ニューヨークやボストン、サンフランシスコを中心に広がったイタリア風のコーヒーハウスは、文化的に尖った雰囲気インフォーマルな、親密なサイズ（intimate size）の空間であった。そこでギター

などの演奏家とコーヒーを楽しむ客が、演奏後などにまじりあって会話を楽しむなど、交流できたとされている。酒類を出すジャズバーなどに比べて、女性や子どもにも敷居が低く、空間的な余裕のなさによって時には黒人の演奏家とも親密・対等に交流できる、多様性のあるリベラルな空間だったとされる。グロースは、当時のコーヒーハウスを、人種やジェンダーの壁を越えて交流することの難しかった当時の人びとがふだん会っていない人たちと出会い、交流できる「紐帯の場所」(nexus venue)と評価している²⁰。

こうしたコーヒーハウスの文化が、60年代以降の公民権運動など、アメリカの民主主義運動と親和性があることは間違いない。ただ、アメリカ社会は、元来、権力からフリーで誰にでも開かれた場としての公共性(パブリック)よりもむしろ、まずトクヴィルが指摘したような個人主義と連帯による共同性が求められる社会である²¹。『サードプレイス』のオルデンバーグは、アメリカ人の傾向として、ヨーロッパ諸国との対比においてだが、「会話に価値を置かない」「会話が不得手」と指摘している²²。「会話」の得手不得手とはもかく、アメリカのコーヒーハウスにおける「会話」は、理念としてもハーバースの注目するヨーロッパ社会での「談話」やわれわれの期待する「対話」とはやや異なるものであったようだ²³。

アメリカの民主主義においては、検閲反対の立場から、ミルの自由論²⁵にルーツのある「言論の自由市場」、すなわち自由な発言の機会を確保することで、市場競争のように有用な言論が残っていくという発想が強い。1919年の裁判においてホルムズ判事(Wendell Holmes Jr.)が「言論の自由市場」の意義を主張し、この考え方がアメリカ社会に定着した²⁶。「言論の自由市場」の考え方は、近年の科学論でも使われている。すなわち「科学的知識」についても、自由市場において真実の知識を選出できる。従って、自由市場における「対話」を通じて科



図2 イタリア風コーヒーハウス²⁴

学的な真実が生まれるというのである²⁷。こうした発想は、「フリースピーチ運動」などの「言論の自由」を重視するアメリカ民主主義の核になる考え方である。

こうしたコーヒーハウスとそのオープンな言論文化も、1970年以降は、個人化の中で衰退していく。社会学者のパットナムは、社会的紐帯を「ソーシャルキャピタル」として社会に効率と安定などをもたらす資本として評価し、アメリカにおけるその衰退を嘆いている²⁸。オルデンバーグもこうした文脈をパットナムと共有した上で、アーレントらの位置づけによれば共に私的空間でしかない職場と家庭に対して、それ以外の、第三の空間として「サードプレイス」の必要性を説いたのである。オルデンバーグは、個人主義と商業主義の強まったアメリカ社会の実態にかなり悲観的で、若者たちが多くのコミュニティ・スペースから締め出され、子どもたちにとってはショッピングモールが学校と家との間の時間を過ごすサードプレイスになっていると指摘している²⁹。スターバックス・コーヒー社は、このサードプレイスの概念を理念と

してビジネスを展開しており、ゆっくりと時間を過ごせるソファなどを設置した店舗をアメリカを中心に世界中に展開している。このように昨今、「対話」のできる空間としてのカフェへの必要は、スターバックス社の指摘するように高まっていると言えるだろう³⁰。ただし、ショッピングモールもスターバックスも、確かに職場でも家庭でもないサードプレイスではあるものの、基本的には商業のための空間であり、自由な公共空間とは言えず、「対話」の場としてのわれわれの期待に応えるものではないだろう。

現在、アメリカ社会では言論の自由な交換はますます困難になっているように思われる。都市空間だけでなく、メディア空間においても社会に開かれた言論の場に対する不信が広がっている。一方には、メディアにおいて権力を握っている既成のマスコミとジャーナリズムへの不信があり³¹、他方には、こうした既成のジャーナリズムと離れてインターネットを流れる情報への不信が広がっている³²。メディアにおける言論の自由市場は他にも、ロゴス（理性）ではなく、パトス（感情）によって、あるいは多数決的な数の暴力によって言論が選択されてしまうのではないかといった原理的な懸念がある。

その結果、社会的分断と暴力による深刻な対立が表面化し、喫緊の社会的・政治的課題となっている。民主党支持層と共和党支持層の対立と相互の不寛容による暴力、マスクやロックダウン、ワクチン接種等の新型コロナウイルス対策をめぐるアメリカ社会の分裂と衝突は目を覆うばかりである。2020年には黒人差別に抗議する社会運動が民主党支持者を中心に盛り上がったが、その一部が暴徒化して商店の略奪が広がった。また2021年の大統領選挙では、共和党のトランプ大統領（当時）支持派の暴徒がホワイトハウスに侵入して狼藉を働き、警察や州兵が動員されて排除された事件が発生している。こうした事件は、アメリカ社会の政治的分断が深刻なものであることを感じさせるものであった。

インターネットの世界は、草創期の70年代ごろには、自由な言論の空間としてのサイバースペースが構想され、理念として共有されていた。LinuxやGNUプロジェクトをはじめとするハッカー倫理に支えられたオープンソース運動、ブラウザとハイパーリンクを備えたwebによる言論の共有など、インターネットの世界を誰にでも開かれた公共的な言論の空間に育てようとする活動が、インターネットの発展を支えたことは知られている³³。そうした理念のもと、古代ギリシャの「対話」や近代的な理性による討議と知識の共有を理念とした「アゴラ」「BLOGOS」あるいは「Wikipedia」などのweb上のオープンな言論活動が見られた。しかし、2000年ごろからインターネット上の活動は、商業化したプラットフォームが支配的となり、こうしたSNSやポータルサイト、あるいは通販サイトなどでは、人々と言論は分極化する傾向が指摘されている。すなわち、似たような傾向を持つユーザー同士が快適な言論やサービス、商品を求めることによって、自分とは異なる他者と向き合い、その意見に触れる機会が失われ（フィルターバブル）³⁴、その結果、インターネット言論に触れる時間の長いユーザーたちは、お互いに話が通じないほどに分断されてしまうのである³⁵。日本においてもインターネット上でのヒステリックな暴力的抑圧として、「炎上」が問題になっている。炎上は、言論の分断というよりもむしろ異論に対する暴力的な抑圧と画一化であるが、メカニズムとしては分極化のそれぞれのグループで生じている均一化の事態とみなすことのできる現象であり、分断と同様、社会の多様性や活力、民主主義を損なうものである³⁶。

サンステイーンは、上記の分極化に対して、議論の広場があること、ロジックではなく攻撃的な言論によるバトルの規制、商業的でない言論や言論の場を政府が支援すること、ある主張や選択に対しては公正（フェアネス）の観点から必ず対抗言論やそのリンクを同時に表示す

る「マスト・キャリア」のルール化、などを提案している³⁷。これらの提案は、民主主義に対して言論の自由を保障するというアメリカ社会の伝統的なアプローチに従うものではあるが、ただ放置しておくのではインターネットのテクノロジーやビジネスによって、言論は機能しなくなる。従って、法とテクノロジーを用いて、対抗する言論の吟味を促すといった仕方でも言論に積極関与し、人々を「対話」に誘導することを提案していると見ることができる³⁸。

「自由市場」的な議論に任せるのではなく、「対話」的な要素を導入することによって、たとえば反対の声、小さな声にも耳を傾ける可能性が生まれ、感情や多数決的な暴力によって自分とは異なる声を抑圧する力を抑制できるかもしれない。また、「対話」による吟味（Street Epistemology）によって、ステレオタイプやフェイクニュースを信じている人でもそれを信じてしまった背景が意識化されフェイクの自覚にいたり、閉鎖的な態度からの脱却や相手への理解の契機が得られるかもしれない。こうした自覚や理解により、深い分断を避けることができると期待されているのである³⁹。このように、相手を理解しないままでも競争的に合意を形成しようとする「自由市場」の考え方から、「対話」によって共感ベースの言論空間を形成しようとする機運が盛り上がっているのである⁴⁰。

近年はとくに、温暖化などのグローバルな環境破壊が人類の生存を脅かす問題として捉えられるようになってきている。こうした状況においては、気候変動といった問題にどう対応するかについて、すべての当事者がだれ一人取り残されずに選択に参加する権利と義務を有することが意識されている。さらに環境問題については（そして社会問題についても同様に）、現在生きている人々だけでなく、これから生まれ、育ち、未来の社会のメンバーとなっていく将来世代の問題でもある。そこで、2020年に注目された『人新生の「資本論」』において、斎藤幸平は「人々がそのような世界に住みたいかという価値判断

は、本当は、将来世代の声も可能な限り反映しながら民主的な熟議や論争を通じて、決定されなければならない」と指摘している。

こうした課題に応えるべく提案された国連の提案するSDGs（Sustainable Development Goals、United Nations、2015年）は、「だれ一人取り残されない」を理念として掲げているが、「エリート主義」とも批判されるハーバース型の「公共圏」⁴²、あるいは個々人の判断を尊重するアメリカ型の「自由市場」においては、将来世代に代表される「声の小さな」メンバーの声は切り捨てられてしまいがちであった。そこで、「声の小さな」あるいは「声の出せない」メンバーとも協働して、「だれ一人取り残さずに」民主的に社会や地域を作っていくという課題と期待が、「対話」には担わされているのである⁴³。

第三章：2030 松崎プロジェクトと、プロジェクトにおける「対話」の位置づけ

「2030 松崎プロジェクト」とは、静岡大学未来社会デザイン機構と松崎町、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会の4者が連携して行われる、「対話」と「協働」をアプローチの中心に位置づけて、図3にあるように、「新しい観光の可能性」が開拓され、「子どもたちと住み続けられる」2030年の松崎を描き、実現するためのプロジェクトである⁴⁴。

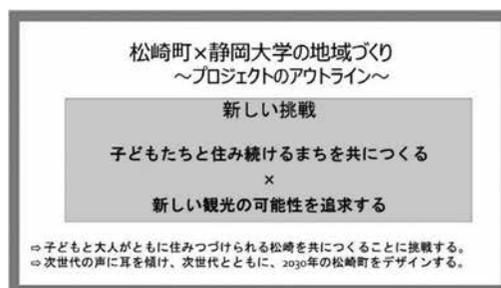


図3 第一回松高ワークショップ説明資料

松崎町は、伊豆半島の南西部に位置する港町で人口は約6000人。古くから海上交通の要所として栄えたが、近年は伊豆半島の他の自治体と同様に人口減少と高齢化が進んでおり、

2021年には高齢化率（65歳以上人口比率）が約50%と静岡県内でも最も高齢化の進んだ地域となっている。恵まれた自然の中、農業や漁業、海産物の干物や桜葉漬等その産物の加工などの盛んな地域だったが、現在はその比率はかなり減少し、観光業などのサービス業に従事するの方が多くなっている。南伊豆地域では下田市に次ぐ中核的な町として、行政や教育、医療、福祉、建設等のサービス業に携わる人も多い。少子化と転出による人口減少と高齢化が町の課題として認識されている。「なまこ壁」に代表される歴史的建造物や多数の寺社、伝統的な祭りなどが大切に残されており、海岸や温泉など伊豆半島ジオパークを構成する美しい自然と合わせて価値ある観光資源となっている。またこうした恵まれた自然と伝統を生かして、俳句等の文化活動が盛んであり、「日本でもっとも美しい村連合」への参加、鏝絵の美術館である「伊豆の長八美術館」の運営、県内の静岡大学や常葉大学などとのフィールドワーク等の協力など、積極的な取り組みが見られる。「2030松崎プロジェクト」もこうした以前からの松崎町の積極的な取り組みや対外協力の土壌から生まれたものである。

このプロジェクトを主導する静岡大学未来社会デザイン機構は、国際連合（UN）の提唱するSDGsに呼応する「持続可能性」への問題意識と発想を持って、静岡大学と地域との連携を進めるための組織として2020年4月に創設された。その「創設理念」は、「私たちは対話を通して、社会のステークホルダーと相互理解を深め、パートナーシップを築きます。望ましい未来社会について、共にビジョンを描き、そこから具体的な課題を明らかにし、その解決のために協働します。持続可能な社会とすべての人のウェルビーイングを目指して、未来社会のデザインに挑戦します」（未来社会デザイン機構ホームページ「創設理念」：脚注44参照）とされている。

本稿の執筆者の一人である吉田は、この未来

社会デザイン機構の「企画推進本部」（当時。2021年度には「作業部会」と名称変更）のメンバーとして、2030松崎プロジェクトの企画と推進に携わってきた。2020年度におけるこのプロジェクトの課題は、創設理念に沿った形で、当事者であるまちの住民たちの「対話」を通じた「2030松崎ゴール s」の策定であった。まずは、地域の人びと自身の未来への思いを、対話を通じて言葉にし、2030年には実現したいまちの姿としてこのビジョンを共有する。それから2021年度以降でこのビジョンを実現するための具体的な目標を考え、これを目指してバックキャスト的に実行すべき活動を意識し、力強くビジョン実現の地域づくり活動を進めていく。こうした計画であった。

本稿の共同執筆者のスター、中野は、吉田とともに2030松崎プロジェクトのスタッフの一員として、「2030松崎ビジョン」（後に「2030松崎ゴール s」に変更された）策定のための数度のワークショップにおいて「対話」のファシリテーターなどをつとめた。本研究は、こうした活動を通じた参与的な観察と分析に基づいて、松崎の持続可能な地域づくりのための活動における「対話」の意義を描き出し、「対話」をめぐる社会的・政治的・思想的な文脈と関連づけて提示しようとするものである⁴⁵。

2020年度のビジョン策定のために開催された「対話」ワークショップは6回（+1回：2021年度）である。2021年の1月29日から、まず松崎町内唯一の高校である松崎高校（松高）での対話ワークショップが2回行われた。次いでやはり町内唯一の中学校である松崎中学（松中）での「対話」ワークショップを行った。松高ワークショップから、「2030松崎ゴール s」（松高案）を作成し、これと松中ワークショップでの対話の結果を、第一回の松崎ワークショップで説明した。次いで、この松高案についてのまちの人びと全員に開かれた「対話」ワークショップを2回行い、年度をまたがった4月に「2030松崎ゴール s 1.0」を策定した。松高、松中ワー

ワークショップを最初に位置づけたのは、持続可能性を志向する以上、町の未来をになう将来世代である中高生の声を大切にする地域づくりが、決定的に大切と考えているからである。「対話」と「協力」を通じた「将来世代の主体的な参加」を重視していることが、このプロジェクトの最大の特色であろう。末尾の「1.0」は、このゴール s は今後も実践を通じて 2030 年までに適宜変更されバージョンアップしていくことを予定して付け加えたものである。(図 4)

日付	名前
1月29日	松高ワークショップ第一回
2月9日	松高ワークショップ第二回
2月28日まで	2030 松崎ゴール s (松高案) 作成
2月20日	松中ワークショップ
2月28日	松崎ワークショップ第一回
3月14日	松崎ワークショップ第二回
4月25日	松崎ワークショップ第三回 2030 松崎ゴール s 1.0 策定

図 4 「2030 松崎ゴール s」策定ワークショップ一覽

この 7 回のワークショップは、すべて「対話」を中心に設計された。基本形式としては、まずその回のワークショップの課題と進め方の説明を全体で確認し、次いで 4-5 人程度のグループに分かれてグループ対話を行い、次にその結果をワークショップ参加者全体でシェアしながら全体で対話してアイデアに言葉を与えていくという進行である。図 5 は、1 月 29 日に行われた松高ワークショップのスケジュールであるが、7 回の対話ワークショップは、ほぼ毎回、こうしたタイムスケジュールで、若干の時間調整をしながら実行された。(図 5)

～ 16:00	受付
16:00～ 16:15	導入 (趣旨説明、進め方の説明)
16:15～ 16:45	グループ対話
16:45～ 17:15	全体対話
17:15～ 17:30	まとめと次回の展望

図 5 ワークショップの基本スケジュール

場所は、松崎高校のセミナーハウス「龍門館」や松崎町観光協会の会議室、松崎町の管理する「松崎町環境改善センター」の広いホールなど、規模に応じた部屋を使用した。新型コロナウイルス感染防止の配慮をしながら、ワークショップ形式の半円形などにイスを配置し、参加者が地位や年齢などに縛られず、対等な個人として対話に参加できるよう十分に工夫した⁴⁶。

毎回の「導入」は、プロジェクトの設計者である竹之内が行った。司会やグループ対話のファシリテーターは、吉田を含む機構教員や静岡大学の教員や学生、卒業生や協力団体からの参加者らがスタッフとして担当した。スタッフ同士は、事前にワークショップの趣旨や進め方、分担などについて綿密な打ち合わせをし、意識的に「対話」を実現するために注力し、事後には反省会を通じて「対話」の実情などについて共有した。

「導入」でワークショップ参加者に共有された竹之内による「対話」への案内は下記である。(図 6)

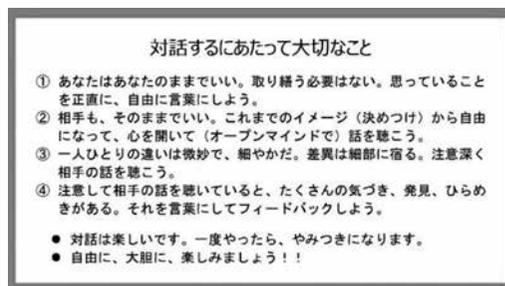


図 6 「対話するにあたって大切なこと」
第一回松高プロジェクト説明資料より

ここで示されている「対話」にあたっての注意は、はじめて「対話」参加する人や、中学生や高校生でも受け止めやすいように、非常に簡略化されている。だが、自らの思いを誠実に言葉にすること、そして相手の話を注意深く受け止め、そこから湧いてくる発見や変化を受け入れること、その喜びについて伝えようとしている。合意を形成しようとするハーバース型の

対話の性格、相互の承認というアーレント的な対話の意義は前面に出ておらず、むしろ言葉による探究というソクラテス・プラトン型の対話の意義が提示されていると言えるだろう。

こうした竹之内の「対話」に対する理解は、竹之内が2014年来取り組んできた「死生学カフェ」の試行錯誤の活動⁴⁷の中で育ってきたものである。この活動とそれを踏まえて「対話」を焦点化した竹之内の論文⁴⁸から、死生学カフェとの差異についても言及しつつ、2030松崎プロジェクトに直接かかわってくると思われる重要なポイントを確認しておきたい。

竹之内の提示する「対話」は、「共通の問いのもと、それぞれの背景や経験に応じて、多様な解答や見解が示される。ある人の発言に触発されて、別の人が発言する。ある言葉を聴くことで、新しい語りが生まれる。」⁴⁹に集約される。ここには2030松崎ワークショップで示された「対話」と同じ方向性が読み取れるだろう。竹之内の「対話」は、まず「問い」があり、この問いをめぐる「探究」の対話なのである。従って、この対話は、感情よりも理性、そして言葉（ロゴス）を大切にする。そして、相手の言葉、自分の言葉と誠実に向き合うことで、新しい発見を生み出そうとする「探究の対話」なのである。

では以下で、まず松高ワークショップにおける対話とその成果や課題（第四章）、ついで住民に対してオープンな松崎ワークショップでのそれについて（第五章）説明しよう。

第四章：松高ワークショップにおける「対話」

松高ワークショップは、2021年1月29日と2月9日に、松崎高校（セミナーハウス「龍門館」）において行われた。第一回の参加者は、松崎高校の生徒会の生徒を中心とした呼びかけに応じた有志7名で、第二回はその友人や噂を聞いて参加した20名だった。

松高ワークショップでは、対話を通じて、松崎2030松崎ビジョンの原案を作成することを

目標としていた。ここには行政としての松崎町役場や大人たちだけによる決定ではなく、地域の将来を担う当事者である高校生の願いこそが、2030年の松崎の進むべき方向の核になるべきとの認識がある。高校生が住みたい、仮に進学や就職でいったんまちを離れたとしても、いつかは戻ってきたいと思えるまちを作らなければ、松崎町の人口流出と衰退を止めることはかなわないからである。

じつは松崎町では、2003年に「町民有志や小・中・高校生、各団体等の参加と協力による「共創」の精神のもと「まつぎき百人委員会」を組織し、『夢』と『希望』に満ちたまちづくりの指針として『第4次総合計画』を策定⁵⁰している。2030松崎プロジェクトは、町役場や町議会からみるなら、こうした松崎町の小・中・高校生を含めた市民参加の取り組みの発展として捉えることができる。ただし、プロジェクトとしては、町による第6次総合計画（2023年度から2032年度）策定・実行と連携しつつも、必ずしもそこに収まらず、町役場からは自立的に、行政区としての松崎町に限定されない形で、2030年の望ましい松崎地域のあり方を追求する姿勢である。

こうした事情を背景に、松崎高校からプロジェクトはスタートした。

第一回のワークショップでは、最初に竹之内から対話の目的と「対話するにあたって大切なこと」の説明がなされた。ついで集まった7人の生徒が2つのグループに分かれ、静岡大学の大学生や教職員がファシリテーターとなって、「松崎のこんなところが好き・嫌い」「わたしはこんなまちで暮らしたい」をテーマにアイデアを出し合った。（図7）

参加者は、竹之内から示された相互の批判や否定の禁止、自分の思いを誠実に言葉にするなどの対話のルールを意識し、真剣に取り組んだ。各ファシリテーターに対しては、事前ミーティングにおいて竹之内から、相手の意見を否定せず、参加者から対話を引き出すことといった指



図7 松高ワークショップ グループ対話風景

針が与えられており、これを意識しつつそれぞれに対話をサポートした。対話においては活発な意見が出て、その意見を B5 サイズほどの付箋に書き、それを模造紙に貼っていった。そして参加者は、この付箋に書いたアイデアを自分の言葉で他の仲間に説明していった。こうすることでグループ全員の意見が全員で一覧でき、また、付箋を自由に移動させることで、似た意見など各意見の関係性を見出すこともできた。(図8)



図8 松高ワークショップ グループ対話ポスター

後半は、このようにしてグループで出し合った意見を、順に発表し質疑応答も含めて全体で共有した。全体としては、松崎の「自然」や「伝統文化」「人間関係」「交通の便」「働く場所」などについて、高校生のふだんの思いが共有された。

テーマに対して、参加した生徒たちはそれぞれが素直に自分の考えていることを言葉にすることができ、また、それぞれの違いについても

その違いを興味深い発見として、しかし否定や批判なしに受け止めることができたのではないかと感じられた。またスタッフ側も、どのような意見が、どのようなベース、どのような言葉で出てくるか、それをどうファシリテートして全体で受け止めていくかの貴重な経験が得られた。「対話」は協働作業であり、その経験を積むこと、そして次回につながるアイデアを形にすることという意味では成果が感じられる第一回のワークショップとなった。

ワークショップ後には、2グループの模造紙を松崎高校の校舎内に貼り、さらに松高生の意見を描くスペースを設け、次の第二回のワークショップまでに松高生の意見を広く集めた。また、第一回の「対話」ワークショップの様子を「松崎ミライ通信」という壁新聞風にまとめ、PDF化してプロジェクトのホームページで公開するとともに、松崎町の回覧版に入れてもらい町内に情報提供した。

20人の生徒を迎えた第二回も、同じ場所ではほぼ同じスケジュールで、ただしグループ数を増やして行われた。今度の対話のテーマは「2030松崎をこんなまちにしたい」である。このテーマは、もちろん「2030松崎ビジョン」の松高案を作成するためのものである。グループ対話では、積極性のある生徒たちの人数も増えて、さらに活発な意見がたくさん出され、つぎつぎに付箋がポスターを埋めていった。高校生5人に大学生1人がファシリテーターにつくグループもあり、言葉をしっかり受け止め、誠実に発するという対話のルールを守るのに苦勞するグループもあったようだ。

グループ対話で出た意見を、第一回と同様に模造紙に付箋を貼ったりマジックで記入したりしながら整理し、全体対話でグループごとに発表して全体でシェアした。松崎高校に貼りだして集めた意見についても、ここで全体共有した。全体対話では、ファシリテーターである竹之内が、付箋の一枚一枚について読み上げ、質疑と並行して発表チームと参加者全体に対して内容

を確認しながら、共通のテーマごとに付箋を移動してホワイトボードにまとめていった。こうして、各グループの意見を統合して松高生全体の意見を作り出していった(グラフィック・ファシリテーション)。(図9)



図9 松高ワークショップ 全体対話
グラフィック・ファシリテーション

ワークショップ後に、各グループのファシリテーターが集まって、グラフィック・ファシリテーションの内容を確認、吟味した。これをファシリテーターをつとめた学生スタッフの一人が大学に持ち帰って、カードを一枚一枚ながら文章化した。その結果、「オンリーワン」「松高の誇り」「自然との共存」「観光」「仕事、新しい定住/移住スタイル」「若者」「中学高校」「子育て教育」「コミュニティ」「サービス(利便性)」「土地、建物の活用」の11項目についての短い文章による説明ができあがった。これは「ビジョン」と呼ぶには具体的過ぎるものだったので、大きなイメージとしての「ビジョン」ではなくより具体的な「ゴール(目標)」を作成することに変更し、ワークショップの目的を、「2030松高ゴールs」を作成することにした。こうして文章化された「ゴールs」は、「2030松高ゴールs」の原型となるものである。

第二回松高ワークショップの後、松高生の中から、松高町民ワークショップで松高町民の前で発表する担当者を募集し、立候補した6名が松高生代表として選ばれていた。上記の11項目のゴールをたたき台にして、ファシリテ

ターをつとめた大学生が音頭をとり、この6名の松高生に「ゴール」を確認してもらい、時間をかけて一つ一つ趣旨を確認し、できるだけ松高生の「思い」を正確に反映したものになるよう文章を修正した。これが「2030松高ゴールs(松高案)」である。地域の高校生全員が参加したわけではないが、町内のすべての高校生に参加のチャンスを開き、作成のプロセスを公開して進めたことで、一定の代表性が確保されたと思われる。じっさい、2回の「対話」において、高校生の望むビジョンや目標には、共通のものが多く見出され、それだけこの対話を通じて得られたゴールs(松高案)は、松高生全体の思いを代表したものと期待できると考えられる。以下が、こうして得られた「2030松高ゴールs(松高案)」である。

2030 松高ゴールs (松高案)

1. 松高の自然・安らぎ・体験のオンリーワンを見つけ、PRしている
2. 伝統の魅力を再発見し、『祭り』が継続している
3. 食べ物が新鮮で美味しくあり続けている
4. 自然を大切にしまちづくりの活動が本格化している
5. 何度でも来たくなる中毒性のある街になっている
6. 地域通貨によるサステナブル・ツーリズムが実現している
7. 多様な世代が観光をプロデュース・発信している
8. 都会のような買い物・飲食ができる
9. たくさんの若い人が仕事を見つけ、松高に住んでいる
10. 子育てをしやすい街になっている
11. 挨拶し合う関係が続いている
12. 松高と都心の相互アクセスが向上している
13. 空き家が有効活用されている

松高高校で行われた2回の対話においては、

大きく二つの成果が得られたと思われる。一つは、もちろん、上記の「2030 松崎ゴール s (松高案)」の作成である。予想以上に広がりのある総合的な目標を、高校生の直接の声を伴って形にすることができた。スタッフにとっては、高校生たちが、現在のまちの課題や取り組みをよく把握しており、それを改善したいと考えていること、自然とコミュニティの豊さに満足しておりこれを失いたくないと考えていること、外から見て魅力的なまちとして注目され、観光客にも来てもらいたいと考えていること、都会的サービスや都会へのアクセスなどへのあこがれが強いことなど、あまり予想していなかった「思い」も、対話を通して感じる事ができた。

高校生にとっては、ゴール s を考えることを通じて、まちの課題について、新しい文脈の中での捉え直しが進んだことがわかった。ワークショップの事後に参加した松高生から提出してもらったフィードバックシートでは、「今日考えた事は松崎町だけの問題だけではなく、南伊豆町や西伊豆町などといった、加齢化と少子高齢化が進んだ地域にもあてはまることだなと思いました。」とあり、まちの課題をより広い空間文脈において捉え直していることがよく分かる。また、「10 年前にも同じような話し合いをした」と先生がおっしゃっていて、「10 年前の高校生が理想としていた町」が「その 10 年後の町」=「今の高校生がたくさん不満をもっている町」で、略」と、過去の経緯の中で現在の課題を捉え直すコメントもあり、やはり対話を通じて新しい文脈の中で課題を捉え直すことで新たな発見があったことがうかがえる。

もう一つの成果は、高校生とそしてスタッフの成長である。2 回の対話ワークショップを通じて、参加した高校生の、対話への姿勢、他者の言葉を受け止めること、自らの言葉で自らの思いを表現することに対する成長が感じられた。最初は、「町の豊かな自然」などとステレオタイプな言葉で語られていたことが、対話を通じて他者の意見や質問をしっかりと受け止

め、自らの考えを正確に表現しようとする努力が感じられるようになった。ファシリテーターを務めたスタッフの側も安易に合意や結論を急がず、言葉の一つ一つ大切に受け止め、あるいは吟味しつつ形にしていく姿勢が育ったと思われる。もっとも、ファシリテーターからは、限られた時間の中で、参加者各自が付箋に自分の考えを表すことと、他者のアイデアを受け止め合い対話が生まれることの両立させるため苦心したとのことである。また、全体対話における発表と質疑も高校生が中心となって行ったことで、高校生の経験と勇気につながり、それが町民全体の松崎ワークショップにおける発表者への主体的な立候補にもつながったようにも感じられた。知識や認識だけでなく、態度や意思における成長は、見逃すべきではない「対話」の大きな成果と言うべきであろう。

一方、今回のワークショップに参加した高校生は、まちの高校生のうちのごく一部に過ぎず、参加していないマジョリティの声や顔は見えてはいない。今回は、高校側の積極的な協力が得られ、教諭に声かけされて参加した生徒もいたようである。こうした生徒にとっては、対話ワークショップも学校の課題のようなものと感じられていたかもしれない。この対話が、実際のまちのデザインに、また自分自身の変革に、つながっていく機会とは捉えられていなかったのではないと思われる。ただ、こうした生徒も含めて、対話の場では自分の言葉で自分の思いを語ろうと努力していたように感じられた。沈黙を恐れず、しっかりと時間をとって自分の思いにことばを与えていき、仲間の前に提示しようとする努力は、価値のあるものであり、おそらく次へとつながっていくものである。高校での「対話」には、そうした消極的な姿勢で関わってきた参加者を巻き込み、積極的な姿勢に転換を促す力があるかもしれない。

第五章：松中ワークショップおよび松崎ワークショップ

松高ワークショップを踏まえ、2月20日には松中ワークショップ、2月28日と3月14日、そして年度をまたいで4月25日には中高生だけでなく、松崎の人びと全員に参加が開かれた松崎ワークショップが、松崎町環境改善センターの大きめのホールを借りて開催された。

松中ワークショップは、松中生23人が参加して、松崎町観光協会の2階の会議室を借りて行われた。必ずしも全員が主体的に集まったのではなく、学校や地域のつながりのなかで言われて参加してみた生徒も相当数混じっていたようだ。最初に趣旨説明があり、その後、松高ワークショップの様子と「松崎ゴールs(松高案)」が紹介され、それを念頭に、ほぼいつものスケジュールで、付箋とポスターを用いたグループ対話と全体でのアイデアの共有を行った。

松中ワークショップの回数は一回、高校生でも「ゴール」がなかなかまとまらなかったことを鑑み、「ゴールs」の松中案をつくるという当初のアイデアは変更され、対話を通じて意見を収集し、これを松崎町の対話の中で紹介して共有するという方向にした。テーマは、「2030年、あなたはどんな場所で、だれとどのような暮らしをしたい?」「そのときになくてはならないものは?」「2030の松崎をどんな町にしたい?」とした。

グループ対話で自分の夢を言葉にするのは参加した中学生たちにとって楽しい体験だったようで、松高のとき以上に素直な意見がどんどん出てポスターは埋まっていった。ただ、松高の時のようにアイデアを整理してまとめ上げるところまではいかず、作業としては、それぞれのアイデアをどんどん出し、それについて順に語り、ポスターで可視化して共有するというところまででタイムアップとなった。その意味では、得られた情報としては、松中ワークショップは松崎についてのそれぞれの思いをヒアリングした程度にとどまるもののように思われた。だが、対話に参加したことによって、生徒たちが得た経験という意味では、貴重な機会となったと感

じられた。

事後に参加した中学生に提出してもらった振り返りシートの、「対話というのは自分的におもしろくないと思ったけど、いがいにおもしろかった。」「自由な発言していいのがとても楽で良かったです。」「大学生が1つ1つみんなのほめてくれたり、「たしかに。」とか「なるほど。」と言ってくれたので、意見を思ったまま言えました。」「自分の夢(ヒーロー)を馬鹿にされず、学校とは違うとおもった」「同じ町に住んでいて友達であっても未来の松崎の話はしたことがなかった」「対話がスゴくたのしかった!!」といったコメントからは、自分の意見が正直に言える場を素直に楽しんでいる姿が浮かぶ。多感な中学生にとっては、普段の人間関係からある程度解かれて評価や強制力から自由に発言できる場ということが嬉しかったのかもしれないと分析するファシリテーターもいる。

また中には、「いろいろな意見がでて自分との違いや共通点を見つけられ、その共通点の部分がより多く重なったのが特にこれからの松崎に必要なんじゃないかと思いました。」といったコメントもあった。こうしたコメントからは、中学生においても、自分の思いを言葉にすること、そして他者の言葉を注意深く聴くという「対話」の楽しさや意義がしっかりと受け止められていることが感じられる。そして、対話を通じて他者の意見を聴き、受入れながらまちの将来を描こうとする地域づくりに向けての態度が育っていることが感じられる。

最後に、次の松崎ワークショップで今回の松中ワークショップの様子を発表する代表者3名が立候補により決定した。ここでも、松高ワークショップの際と同様、特定の候補者を指名したり促したりすることなく、自分から主体的に手を挙げるという竹之内の方針が貫かれた。はたして3名の中学生の発表者が得られたことは、頼もしいことであった。

2月28日からの3回の松崎ワークショップは、中高生を含めて、各回30～60人の地域住

民が参加した。松高案をベースに、松中生の意見も考慮しつつ、対話を通して「2030 松崎ゴール s」のバージョン 1.0 を作り上げることが目的である。

松崎ワークショップの第一回は、「対話」についての対話」と称して「対話」とは何かについて 5 人程度の参加者がその場で車座になって言葉を交わし、それを全体で竹之内の司会、吉田のグラフィック・ファシリテーションによって意識化した。これは、「大人」が中高生の言葉を尊重してしっかりと受け止め、そこからアイデアを出すための下ごしらえであった。

「対話」について自覚的になったところで、松中・松高でのワークショップの報告と、「2030 松崎ゴール s」の松高案が紹介されこれについて全体質疑を行った。「エコ・ツーリズム」、「祭り」、「都会的な飲食」、「自然を大切に」といった「ゴール s」の個別の項目について、いくつかの意見やアイデアが出たのでそれは記録して、次回のワークショップに持ち越すことにした。

松崎ワークショップには、中高生、その家族、教育関係者、観光従事者、退職者、子育て中の女性、U ターンしてきた若者、役場の職員、議員や町長まで、老若男女の多様な参加者が揃った。ワークショップ冒頭の趣旨説明において竹之内から、この場では「〇〇先生」などの呼称をなくし、お互いに「さん」づけて呼び合おうという提案があり、できるだけ対等の個人として対話に参加するよう説明があった。地位や年齢などに関係なく車座になり、そこで中高生の思いが言葉として共有されたこと、そして松高案として「2030 松崎ゴール s」が提示されたことは、意義が大きかったと思われる。

また、全体対話においては、中高生からの提案を受けて、「高校生、中学生の意見からは、この町をほんとうによくしたいんだな、という思いが伝わってきた。祭りや特産物など、松崎のよいところを考えている。」「昔は、自分たちには町外に出たいという思いがあった。大人世

代だけで話すと、まず「できない」となってしまっただろう。だが、少しずつでもできる方向を目指していきたいと思った。」といった意見があった。中高生たちの言葉が、まちの公共空間に現れ、まちの人たちに届き、まちの人たちの意識を揺さぶっていることが読みとれるコメントである。「将来世代の声を受け止め、持続可能な未来を描く」という意味では見逃すことのできない言葉であろう。

一方で、松高ワークショップや松中ワークショップにおいて、まちを変えたいという中高生の言葉に対して、教師や見学に来ていた大人から、「無理だ」「以前もこんな話をしたが町は変わらなかった」というネガティブな諷めるような発言があった。さらに、まちでは成績の優秀な子、やる気のある子がいたら、そういう子はまちの外に進学するように勧めるものだったという話も聞いた。中高生たちは、そうした中で、粘り強く自分たちの「2030 松崎ゴール s (松高案)」を作りあげ、提示したのである。こうした文脈において先のコメンを受け取るなら、中高生が今のまちのすばらしさを高く評価していること、それを守りたいと考えていることは意外に感じられるだろう。そして、そうした中高生の言葉を受け止めることで、まちの人たちの意識が、従来から変化しようとしていることを感じることもできたと思われる。

次の松崎ワークショップ第二回は 3 月 14 日に同じ環境改善センターで開かれ、44 人が参加した。ここで、「2030 松崎ゴール s (松高案)」とこれに対して先のワークショップで出された意見を確認したのち、4～5 人のグループに分かれ、グループ対話を行った。2030 年の松崎の目標としたいものを付箋に書き出し、模造紙に貼っていく。そして、全体で発表し共有するという、松高ワークショップと同様の作業を行った。(図 10)

松高案に対する多くの提案や情報、可能性についての意見が出され、また松高案の項目にはなかった目標も多数出された。例えば、「高齢



図 10 松崎ワークショップ 全体対話

者が安心して暮らせる住みやすいまち」「ITを生かして遠隔医療サービスやワーケーションを実現」「農業の担い手がいて農産物を直接観光客やまちの人に売れる場所がある」「空き家などを改造して、松崎の歴史や文化を学んだり、まちの未来を構想したりできる場所がある。またそういう体験を通じての学びがある」「ボランティアのまちにしたい」「アジアに向かって開かれたまちにしたい」といった、松高案や中学生の意見にはなかったものも提示された。

これを踏まえて、最終的には松高案のいくつかのゴールを統合したりして編集し、新たにいくつかのゴールをつけ加え、4月25日の第三回松崎ワークショップでの最終確認と微修正を経て、以下の「2030松崎ゴールs 1.0」を策定した。

2030 松崎ゴール s 1.0

新しい観光の可能性

1. 松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち、何度でも来たくなる「中毒性」のあるまち
2. 「ささる」観光を多様な世代がプロデュースし、多様な発信とPRを展開している。
3. エコ・ツーリズムとサステナブル・ツーリズムが実現している。
4. 地域の交通ネットワークと都市との相互アクセスが整備されている。

松崎のよさを守る

5. 地域の資源・資産のユニークな価値が発見され、活用されている。

6. 伝統の魅力が広く共有され、「祭り」などが継承されている。
 7. のう（農）とりょう（漁・猟）の活動が受け継がれ、食べ物が新鮮でおいしい。
 8. 地区・世代を超えた人間関係が守られている。
- すべての世代が活躍できる**
9. 子育てをしやすいまちである。
 10. 多様な選択肢のなかから、やりがいのある仕事に就ける。
 11. 都会的な飲食・買い物も楽しめる。
 12. 高齢者になっても活躍できるまちである。
- 共有し学び合う**
13. 三余塾の伝統が受け継がれ、市民たちの学び合いの場がある。

松高案の13個のゴールから、数は変わっていないが、中身は整理されているのが分かるだろう。例えば、松高案の「食べ物が新鮮で…」は最終的な「松崎ゴール」では「のう（農）とりょう（漁・猟）…」に、「何度でも来たくなる中毒性…」は「オンリーワン」に統合されている。また「挨拶し合う関係」は「地区・世代を超えた人間関係」に捉え直されている。そして、「自然を大切に…」は、自然をうまく維持・活用するという趣旨で、「オンリーワン」「エコ・ツーリズム」「のう（農）とりょう（漁・猟）」などに分散して残されている。一方、「交通」「伝統」「子育て」「都会的な飲食」は文言を変えつつもほぼそのまま残っている。そして、「高齢者の活躍」と「三余塾の伝統…学び」については松高ではまったくアイデアが出なかったが、松崎ワークショップを経て新規で追加された目標である。

ゴールs（目標）の文言については、ワークショップで新しい意見が出ればその場で趣旨を確認し、スライド画面を全体で共有して、文言を変えるべきか、ゴールを増やしたり減らしたりするべきかなど、提案者の意見を確かめ記録する。これについて異論や関連する意見がないかなども確かめて、その場で修正するか修正

すべき方向を決める。そして次回のワークショップで、修正された新しいゴール s を確認する、というプロセスで意見の反映を進めた。

こうして完成した「2030 松崎ゴール s」は、一言一句、言葉にこだわって、対話を通じた共同によって作り上げた、「思い」のこもったまちの目標である。5月のワークショップでは、この13のゴールに対して、自分が関心のあるゴールに集まる形で、実現のためのプロジェクトチームを結成した。メンバーを無理に割り振ることなく、自分が関心のあるゴールを目指すことを大切にしたので、結果的に13のゴールうち、9つのゴールに対してチームが立ち上がった。夏には新型コロナウイルスの感染が再び爆発的に広がり、活動の停滞を余儀なくされたが、9つのチームに加えて、「防災」「エネルギー」の2つのスタディ・グループ、「メディア・広報」を担う横断的チームが、ゴール実現を目指してプロジェクト・チームとして活動をはじめている。

松中ワークショップ、松崎ワークショップを通して得られた成果としてはまず、「2030 松崎ゴール s」を得たことであるが、その価値はこの「ゴール s」を策定する「対話」の過程にあると言うべきだろう。松崎ワークショップにおいて、行政や議員、役場職員や教師、退職者、子育てしている親、などなど、多様な人々が、松高生と松中生の言葉と真剣に向き合い、まじめな対話を通じてお互いの思いに向き合って作り上げたという点にこそ、この13のゴールの価値は存する。このゴールは誰かに与えられたものでも、どこかからコピーして借りてきたものでもない。一語一語にまちの誰かの「思い」や、「思い」同士のぶつかり合い、認め合いが反映しているのである。その意味で、この「ゴール s」は、まさに共同作業の成果であり、共同の宝である。毎回のワークショップにおいて一語一語全員で確かめながら作成を進めたことで、少なくとも実際に時間と集中力が注ぎ込まれた分は、参加者の全員の意識に共有されていた

ろう。

また、この「対話」の過程において、ワークショップに参加した中高生は、町長や町議、教師や大学生、大学教員ら、さまざまな立場の人と対等の立場でことばを交わした。ファシリテーターを担当したスタッフは、言葉に対して真剣に向かい合い、参加メンバーを対等に扱うようにというルールを共有していた。すなわち、アレントの言う「誰 who」として参加者を扱い、「何 what」として扱わないということであり、それ自体が対話に面白さや魅力をもたらしていたと考えられる。「対話」を楽しんだ松中生のコメントを先に確認したが、まちの住民からも「対話」を通じて、自分のもっていない考えに気づけてよかった。「意見交換の機会是他にもあったが、参加する人が限定されていて、話も滞りがち。より多くの人で共有していくことが必要だと思う。新しい仲間を少しずつ作っていき、新しいビジョンを作って、どうしたらやっていけるのかを考えていきたい。」など「対話」や公共性に通じる「対話」の理念につながるコメントが出ていた。

松高ワークショップと同様、ワークショップに参加した人数は、町全体の人口から考えればわずかである。その意味では、「2030 松崎ゴール s」が、町全体で決めた目標であるという正統性を主張するのは無理があるかもしれない。だが、毎回のワークショップの内容を紹介する「松崎ミライ通信」を作成して、ホームページに提示する以外にも、回覧版にいらていただき、時には全戸配布でまち全体に伝える努力をした。こうしてまちの人々全員と情報共有し参加に開かれた形で進められたことは、民主的正統性の観点から見ても重要であると考えられる。

ただ、グループ対話において同じ職場の大人が何人か同じグループにかたまってしまうと、どうしても組織上の立場やふだんの人間関係が持ち込まれがちであった。そういうグループのファシリテーターの中には、言葉と真剣に向かい合う「対話」の姿勢をつくり維持するのに困

難を感じた者があったようだ。どのような社会でもこうしたことはあると思われるが、松崎のように小さなコミュニティで対話を設計する場合には、とくに配慮する必要があるかもしれない。

第6章：対話の可能性と課題

「2030 松崎ゴール s」を作り上げるために行った7回の対話ワークショップを通じて得られた「対話」についての知見をまとめよう。私としては「対話が」参加者にもたらす「3つのマインド」に注目したい。この「3つのマインド」は、「持続可能な地域づくり」を推進する上で、それぞれ重要な可能性を持つのではないかと考えている。

「対話」がもたらす可能性として筆者の指摘したい3つのマインドは、1: 信頼のマインド、2: 変化のマインド、3: 参加のマインドである。対話の参加者が対話を通じてこうしたマインドを持つことで持続可能な地域づくりは大いに促進されると考えられる。

1：信頼のマインド

信頼のマインドは、アーレントが「対話」に求めた相互承認の効果から形成される。日本の地域社会においては、地域の資源の所有、経験の蓄積、社会的役割の独占などによって、通常年長者たちが大きな権力を持っている。若者は、そうした権力関係に忖度して、自分の思いを言葉にできないままに割り振られた役を果たすことが多い。あるいは、そういう権力関係を拒絶して地域を出たいと考えることも多いだろう。

こうした状況では、若者は権力に対する忖度に追われ、また与えられた役割を演じることに追われ、自分の意思やアイデアを素直に出すことはむずかしいだろう。つまりアーレントの言う「何 what」に埋没し、「誰 who」であることが難しく、「現れの空間」で存在を認められることも困難である。こうした中では、人と人が直接に向き合って考えを出し合い、信頼関係を

育てることは難しいと考えられる。

参加者の全員が「何 what」を離れて「誰 who」として、真摯に自らの考えを言葉にするとき、人はその相手を信頼することができるだろう。松高ワークショップや松中ワークショップにおいては、グループ対話に参加した中高生同士、おそらくファシリテーターを担当した大学生同士は、「対話のルール」を意識的に共有し、それによってその場ではお互いに「誰 who」として向き合うことができたのではないか。中高生たちのまちに対する自由闊達な意見、中でもステレオタイプの表現にとどまらずに自らの言葉でまちの将来を語る姿には、そういった相互の信頼が反映していると考えられる。

ところで、松高と松中のワークショップにおいては、学校や教育に対する意見はまったく出なかった。それは会場で佇んでいたり巡回していたりしながら生徒たちの対話を見守る教師や私自身を含めた静大の教員たちに対して、生徒たちが警戒、萎縮したり忖度したりして、素直な言葉を紡ぎ出せなかったのではないかと推測される。対話の中に入らず外部から観察する主体は、対話の参加者たちにとって確かに警戒すべき主体であろう。なぜならば、対話への参加者は真摯に自らと向き合い、自らをさらけ出すとしているのに対して、外部の者は「何 what」にとどまり、自らをさらけ出すことなく、自らをさらけ出している者を観察し、ときに介入してくる存在だからである。

人びとは対話に参加することで直接に一人の人間（「誰 who」）として相手と向き合い、「対話」を通じた信頼関係を築くことができる。こういった相互信頼のマインドは、対話と地域づくりを持続的に支える「ソーシャル・キャピタル」として機能し、対話の継続と地域づくり活動の成否により影響を及ぼし続けるだろう⁵¹。これこそが、分断の進む現代社会において対話が期待されるゆえんであり、分断や分極化を憂え、ソーシャル・キャピタルやサード・プレイスに期待する多くの論者たちが対話に期待する

べきことである。

人は自らが「誰 who」として現れることのできない場所や地域に愛着を持ち、そこに止まろう、戻ろうとし、そこで人生を送ろうとするだろうか。特に、家族や身近な友達関係（「親密圏」と呼ばれる）にとどまらず、地域の将来を考えると、地域の人びとは公共空間で協力を形成する必要がある。この時、人びとが「誰 who」として現れ、出会い、協力を形成するために「対話」が人と人を信頼によって結びつけるという重要な役割を果たすのである。自らに向き合って自らを誠実に言葉として表現し、相手の言葉にも真摯に向き合って受け止めようとする「対話」は、こういった信頼のマインドを参加者に生み出すとともに、生み出された信頼が今度は「対話」を支え、地域活動を持続的に発展させるという面が、「対話」に期待できる最初の可能性として筆者が挙げたいものの第一である。

次に、変化のマインドについて説明する。

2：変化のマインド

対話は相手の話をよく聴いて受け止めあることで成立する。この点は、ソクラテス型、ハーバース型、アーレント型に限定されず、すべての対話で重視される対話の一般的倫理である。

竹之内が「対話にあたって大切なこと」で述べていたように、対話においては「注意して相手の話を聞いていると、たくさんの気づき、発見、ひらめきがある。」対話はこれを言葉にしてフィードバックし、その相互行為の中に成立するものである。この事態は、対話が参加者にもたらす「変化のマインド」として評価することができるように思われる。注意して相手の話を聴いているとき、自分でも思っていなかった言葉が湧いてくることがある。そして、それまでの自分では口にする事のなかった新しい言葉を、いつの間にか、真剣に、誠実に口にしていく。これは、聴くことを通じて、自分が変化したということである。同じことが対話の相手

にも生じうるだろう。すなわち、自分の口にした言葉が相手に受け取られ、浸み込んでいったとき、相手が変わることがある。対話するとは、この変化を受け入れるマインドを身につけるということでもあるだろう。

この変化のマインドは、創造性を導くマインドでもある。このマインドは、ソクラテスの探求的対話に最も近いものかもしれない。ソクラテスの「無知の知」は、自らの以前の思い込みや習慣的な思考に固執せず、変化に対してオープンなマインドであると受けとることができ、「産婆術」は相手の心に新しいアイデアが宿り変化をもたらすことをサポートする態度と技とみることができるだろう。そして、新しいアイデアを導くこのマインドは、創造の力、あるいは対話相手との共創の力と評価することができるだろう。

松崎ゴール s 策定において、高校生から出てきた「自然を大切に」というゴールは当初いかにもスローガンの的でステレオタイプなものに聞こえた。だが、それはこういうことだろうか、いやこういうことだろうか、と対話を重ねていくうちに、「自然を大切に」という言葉は、農や漁、あるいは子育てや観光の営みの中で具体的に捉えなおされ、「ゴール s」の中で生き生きとしたイメージを得た。これは「自然を大切に」という目標をめぐる対話の引き起こした高校生たちの変化であり創造である。

ゴール 11 の「都会のような買い物・飲食ができる」も、同様に松高生から出てきたゴールであり、スタッフや大人たちと同様、私自身も、批判や否定はしないものの、これは自然や農を大切にするという松崎のゴールと矛盾したイメージではないのか、そもそも現実的なのだろうかと懐疑的・悲観的な気持ちになった。だが、対話を繰り返すなかで、これは松崎の豊かな自然や文化を否定しているのではなく、同時に都会的な飲食や買い物ができるそんなまちが本当に望ましい、もしそのようなまちならば、まちを出ていくのではなく、できたらこのまち

に残りたいかも、という正直な思いであることが分かった。結果、この言葉はゴールとして残り、プロジェクトとして実現を目指していくことになった。私自身が今は、そうした取り組みを見ながら、「都会的」とはどういうことなのか、本当に「松崎の自然や文化と両立」することはそんなに大変だろうか、と再考し自らの中に変化を感じている。じっさい、これは無理ではないのかもしれない。今はそう考えはじめている。「対話」が、私自身のなかにそういった変化を生み出したのであり、いまは、新しいライフスタイルの可能性はこうしたマインドから生まれるのかもしれないと感じ始めている。

3：参加のマインド

参加のマインドは、ハーバーマスの実践のための合意を求める対話に見られる心の動きとすることができるだろう。ソクラテスの対話が「真理」を求めての対話であったとしたら、参加のマインドを導く対話は「実践」のための「合意」を求める対話である。「変化のマインド」では考え方の変化を指摘したが、「対話」は参加する者の意思や態度もまた変える力があると考えられる。

たとえば、私たちの「2030 松崎ゴール s」は一つの合意であり、共同実践を導くものとしての約束という側面がある。ソクラテスの対話は、言葉によって真理に到達するための活動であったが、実践の対話によって得られる合意、たとえばゴールの一つ一つは、最初から真実か偽であるかが決まっているわけではない。むしろ今後の私たちの取り組みによって、それが達成されたとき、いわば「真になる」のである。真理を求める私たちのマインドは、偽の言葉を選けるのではなく、今はまだ実現していない約束をかなえようとする行為、すなわち「実践」を導くだろう。つまり、言葉が行為を呼び起こすのである。

言葉が実践を呼び起こす条件とはどのようなものだろうか？ ただ自分のことを言葉にし

て、それが相手に承認されたとしても、とくに実践に導かれないことが考えられる。従ってアーレントの言う承認は、必ずしも人を行為に導くとは限らない。また、ハーバーマスの討議によって、自分の言葉が批判され、別の表現に修正されたり、排除されたりしたら、その合意に義務として嫌々従うことがあっても、言葉に触発されるように実践に導かれることはないだろう。おそらく、実践を触発する言葉とは、参加者自身のことばであると同時に、未来に向けた真剣な誓いのような効果を持つものである。もし対話によって、こうした言葉を生み出すことができれば、それは対話に参加した人々を結集させ、協働を実現しようと促すすばらしい言葉となるだろう。未来志向の地域づくりの「対話」には、こうした力を持つ言葉を生み出すことが期待される。

ただ、ここには、おそらく非常に困難な問題があると思われる。死生学カフェにおいて、竹之内は真摯に自らの思いを言葉にすることによって、それぞれが「どう生きるかを学ぶ」場になると言う⁵²。そして対話を通じて、「各人の生が形を変える」と言う。死生学カフェにおいて言葉が各人の生を変えることされるのは、「生と死」は各人が自分で取り組まなければならない自らの問題であるからだろう。だからこそ、自らの思いを誠実に言葉にしたならば、そこで意識化された言葉は、まさに自分の存在や意思への気づきであり、それがその人を動かすのは不思議ではない。

これに対して、地域づくりのための対話は、各人が自らの問いをもちそれに対して各人バラバラに取り組むのではなく、地域の仲間と力を合わせて、共同で取り組むのでなければ、持続可能な地域を生み出していくことができない。つまり、地域づくりの実践を導く言葉は、自分の言葉であるだけでなく、仲間と共有された言葉でもなければならない。だが、各人が真摯に自分の思いを語る言葉と、仲間と共有された協働を導く言葉とは、はたして両立できるものな

のだろうか。

アーレント的な各人の存在と深く結びついた言葉を使って、効果的に対話を進め、ハーバード的な合意を導くことができれば、それは、その合意に参加した各人を参加と実践に導き、かつ協働的な地域づくり、社会づくりを実現する力ある言葉となるだろう。だが、自らの思いを抜きにした合意は各人を動かす力を持たないだろうし、合意として共有されない言葉は協働を生み出すことができないだろう。

この理論的に困難な事態は、実践においてもやはり課題となるように思われる。松崎プロジェクトで作上げた「2030 松崎ゴール s」は一体誰の言葉でできあがっているのか。中高生、大学生、行政、住民、協力者である大学や企業などのメンバー、そしてそれぞれのメンバーも個人個人異なっており、けっして一枚岩ではない。合意されたゴール s は果たして、どのような言葉として各人に捉えられているのだろうか。この問題は、本質的なジレンマを抱えているように感じられ、地域づくりのための「対話」には必ず生じる問題であると思われる。本稿では、この問題についてここで解答して解消することはできない。この問題は参加マインドに関わる残された課題として引き続き実践、理論の両面から手がかりを探しながら検討していきたいと思う。

おわりに

以上、2030 松崎プロジェクトを事例とし、未来志向の地域づくりにおける対話の可能性について思想史的文脈も踏まえて検討してきた。最初に平田オリザの分類などを手掛かりに「対話」概念を確認し、次にこうした「対話」に認められてきた意義を思想史的に確認した。「対話」は、議論や討論といった隣接する概念と区別して、「一つのテーマや問いに対して真摯に言葉を交わし、テーマと自他に対する理解を深めるための活動」として捉えられた。ついで現代社会・情報社会の動向を踏まえつつ、現在「対

話」に寄せられている期待を確認した。「対話」には、現代社会やインターネットで深刻になっている分断を和らげる力が期待されているのである。

つづいて、本稿が事例として分析する 2030 松崎プロジェクトを概観し、そのプロジェクトにおける「2030 松崎ゴール s」策定という課題における「対話」の内実や位置づけを確認した。続いて松崎町内の高校である松崎高校でのワークショップについて狙いやプロセス、対話が生み出した成果や課題を整理した。そして松崎中学校で 1 度開催された対話ワークショップを踏まえて、「2030 松崎ゴール s」策定という課題に向けて 3 度にわたり松崎町で開かれたワークショップとそこで行われ対話と成果について分析した。これらを踏まえて最後に、地域づくり活動における対話の可能性を指摘した。とくに「信頼のマインド形成」「変化のマインド形成」「参加のマインド形成」という 3 つを検討した。「対話」は、うまくいけばこうした 3 つのマインドの形成によって相互理解や創造性、参加を促すものと考えられる。ただ同時に、社会づくり・地域づくりを促す対話で用いられるべき言葉は、参加者各々の言葉であるべきなのか、それとも他者と共通の言葉であるべきかという深刻な検討課題があることを指摘した。

「対話」の実践には困難な問題が多々あるが、持続可能な地域づくりの方法として大いに期待できる面を持っている。地域づくりにおける「対話」の意義と可能性、課題については、引き続き「2030 松崎プロジェクト」の進展とともに多くの側面がより深く明らかになってくるだろう。そうした成果は、筆者らプロジェクト関係者によって、とくに本稿でもその役割に言及したが竹之内本人によっても、論文や書籍という形で順次公表される見込みである。また、静岡大学未来社会デザイン機構としても、「対話」を中核に据えた松崎地域でのこの協力モデルがうまく進めば、静岡県内の多くの地域づくりに生かしていくことができると考えている。

【謝辞】

本稿執筆にあたって、「2030 松崎プロジェクト」を共同で推進している松崎町役場、松崎町観光協会、伊豆半島ジオガイド協会、そして松崎高等学校と松崎中学校のご協力に感謝いたします。また、同プロジェクトの主要メンバーであり「対話」概念を中核に据えてプロジェクトをリードしている静岡大学未来社会デザイン機構（現副機構長）の竹之内裕文氏、松崎町企画観光課（当時、現松崎町長）の深澤準弥氏、そして、静岡大学内外、松崎町内外のすべての「2030 松崎プロジェクト」参加者と運営スタッフに深く感謝いたします。

【資料】 2030 松崎ゴール s 1.0

2021.05.30

2030 松崎プロジェクト

新しい観光の可能性

1. 松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち、何度でも来たくなる「中毒性」のあるまちになっている。

【キーワード: オンリーワン、一体化パッケージ化、松崎中毒、真正な感動や満足】

松崎は、海、山、星空といった豊かな自然や「なまこ壁」に代表される歴史的まちなみに恵まれている。こうした自然やまちのなかで、松崎ならではの食文化や挨拶をし合うような温かい関係が大切にされている。この松崎から一体となって生み出される真正な感動や満足といったものは、他の地域にはみられないこのまちならではの魅力である。この松崎の魅力がオンリーワンの体験を生み、松崎が、訪れた人にとって何度でも来たくなるような中毒性のあるまちになっている。

2. 「ささる」観光を多様な世代がプロデュースし、多様な発信と PR を展開している。

【キーワード: 「ささる」観光、ストーリー化、ドラマ化、SNS、PR、グローバル、観光客参加型の発信】

松崎のオンリーワンの魅力を多様な世代に対して印象的に PR している。あらゆる世代に向けて均質な発信ではなく、若者には若者向け、高齢者には高齢者向けというように、それぞれの世代に「ささる」発信（ふるさと納税、クラウドファンディング、…）を行っている。そのために、若者や高齢者それぞれの世代が参加し、観光客の声を聴き／ともに参加してもらい観光のストーリー化や尖ったイベントの開催など、PR の方法を工夫している。「ささる」PR に触れた人が、松崎で自分を待ち受けている体験に期待をふくらませている。

3. エコ・ツーリズムとサステナブル・ツーリズムが実現している。

【キーワード: エコ・ツーリズム、サステナブル・ツーリズム、持続可能、体験】

松崎の豊かな自然を体験しながら学べるエコ・ツーリズムが実現している。また、松崎の自然環境や文化の魅力、経済が持続するサステナブル・ツーリズムが実現している。安易な観光開発によって地域の魅力を切り売りせず、松崎の自然や文化、人の営みの豊かさを保っている。訪れる人々が、松崎の自然や文化を尊重し、持続可能な新しい観光を楽しんでいる。

4. 地域の交通ネットワークと都市との相互アクセスが整備されている。

【キーワード: アクセシビリティ、相互アクセス、交通ネットワーク】

交通サービスが整備され、松崎周辺の移動が容易になっている。例えば、修善寺や下田といった近隣の町との交流、通勤・通学などがしやすくなっている。また、松崎から都市、都市から松崎へのアクセスが向上している。例えば、三島や沼津といった都市にもショッピングや映画、用務などに訪れやすくなっている。さらに、東京や静岡などの都会からも松崎を訪れやすくなっている。

松崎のよさを守る

5. 地域の資源・資産のユニークな価値が発見され、活用されている。

【キーワード：耕作放棄地、空き家、運動場、未整備の施設、山林（杉林、里山）、海、景観、潜在的価値】

松崎には、うまく活用されていない土地（空地）や建物（空き家）、農地、山林、海などの地域資源・資産が多くある。それらの潜在的価値が新たな視点から発見され、観光施設、住民交流や学習の拠点、子どもの遊び場などに有効利用されている。こうして、評価されていなかった地域資源・資産が生活や観光にうまく利用されている。

6. 伝統の魅力が広く共有され、「祭り」などが継承されている。

【キーワード：なまこ壁、秋祭り、体験の共有、担い手、遺産、修繕・維持】

松崎では、祭り、寄り合いや講、寺社、文化財、まちなみ、温泉などが、人びとを結びつけ、世代から世代へ大切に受け継がれてきた。「なまこ壁」のような歴史的建造物や「秋祭り」といった伝統行事、「棚田」のような土地利用は、代表的なものと言ってよいだろう。しかしこれらの伝統は、後継者の減少し風化するなど危機にさらされている。2030年には、なまこ壁修復や祭りへの参加などの体験が広く共有され、新たな担い手が育っている。

7. のう（農）とりょう（漁・猟）の活動が受け継がれ、食べ物が新鮮でおいしい。

【キーワード：農業、漁業、狩猟、直売所、農業体験、後継者】

のう（農）とりょう（漁・猟）の営みが受け継がれており、松崎の野菜や魚が、2030年にも新鮮でおいしく食べられる。後継者が育っていて、現在の農地と港が維持され、農業と漁業が守られている。また、農業体験や家庭菜園、魚釣りなどを通じて、自然と結びついた松崎の生活スタイルが広く共有されている。農と漁の多

様な営みに支えられ、地域の食の魅力を実感できる場（直売所など）がある。

8. 地区・世代を超えた人間関係が守られている。

【キーワード：挨拶し合う関係、共食の機会、郷土料理の継承、オープン、見返りを求めない関係】

地区や世代の垣根を越えて、挨拶し合い、お裾分けする関係が、松崎の文化として守られている。大人から子どもへ昔遊びや郷土料理を伝承する場や、まちの人どうしが食を共にする機会が確保されている。これらの場や機会を通して、互いに信頼し、見返りを求めずに助け合える関係が根を張っている。そこから訪れる人に対しても、積極的に挨拶し、歓迎するまちになっている。

すべての世代が活躍できる

9. 子育てをしやすいまちである。

【キーワード：子育て支援、相談できる場、自然に親しめる場、遠隔医療】

出産や子育てを支援する制度やサービス、施設が充実している。地域コミュニティで相談や協力しながら子育てができる。公園、ビオトープ、アスレチックなどが整備されており、子どもたちは、安全の確保された環境でのびのびと遊んでいる。海や山、川など身近な自然の中で遊び、成長している。人びとがここで子どもを産み育てたいと思えるまちになっている。

10. 多様な選択肢のなかから、やりがいのある仕事に就ける。

【キーワード：若者、多様な選択肢、人生設計、ワーケーション、関係人口】

多種多様な仕事、若者たちが誇りをもてる仕事があり、松崎が若者の暮らしたいまちになっている。都会に出なくても地域でやりたい仕事を見つかることができ、人生設計ができる。一度離れた人も、松崎に戻って暮らすことができる。ワーケーションや長期滞在、移住などの新しい

アイデアにより、松崎の関係人口が増えている。こうして、若者にとって魅力的なまち、若者が活躍するまちになっている。

11. 都会的な飲食・買い物も楽しめる。

【キーワード：調和、都会、おしゃれ、楽しく過ごせる場、サードプレイス】

松崎の豊かな自然や独自の文化に誇りを抱いている。同時に、都会との隔たりを感じることなく、飲食や買い物を通じて、都会から発信される文化や情報に触れる機会がある。中高生は、飲食や買い物を楽しみながら、学校帰りに安心して時間を過ごすことができる。そのため都会志向を持っていても、松崎の生活を心おきなく楽しむことができる。

12. 高齢者になっても活躍できるまちである。

【キーワード：高齢者、役割 or 誇り、町内交流、バリアフリー、潜在能力】

地域社会の一員として役割をもち、自分らしくいきいきと暮らしている。医療サービスなどが充実しており、健康に安心して暮らせる環境が実現されている。地域の活動や町内の交流、行政サービス、買い物などがバリアフリーになっている。長年の知恵や経験を活かし、潜在能力を発揮して、まちのために協力している。

共有し学び合う

13. 三余塾の伝統が受け継がれ、市民たちの学び合いの場がある。

【キーワード：三余塾、対話、学び合い、ビジョン、ゴール s、学校教育】

訪れやすく居心地のよい空間で、新しい仲間との出会いや好奇心を充たす学びが待っている。そこに足を運ぶと、松崎の歴史や文化、直面する課題や可能性が共有できる。そのような学び合いの場で、将来に向けての展望（ビジョン）と具体的目標（ゴール s）が熱く語り合われている。多数のプロジェクトが進展し、わたしたちのビジョンとゴールが達成されている。

文末脚注

- ¹ 例えば、納富信留『対話の技法』笠間書院、2020年、pp.12-13
- ² 例えば、ケネス・ガーゲン『現実はいつも対話から生まれる』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2004=2018年
- ³ 山田圭一「学校教育における哲学対話の意義と位置づけについて」（『文化と哲学』34、静岡哲学会、2017年、pp.19-33）、p.19などを参照。あるいは、「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」文部科学省、2017年
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm（2021年10月15日 取得）
- ⁴ ピーター・M・センゲ『学習する学校 子ども・教員・地域で未来の学びを創造する』栄治出版、2012=2014年、p.186
- ⁵ 納富（2020年、pp.74-76）は、フェイクニュースやポスト・トゥルースによって失われた言論への信頼の回復を対話に託し、ガーゲン（2018年、pp.72-74）は、言葉が現実をつくっていくという社会構成主義的な立場から、現実を民主主義的によりよく再構成するための言葉を生み出すものとして「対話」を重視している。
- ⁶ 平田オリザ『対話のレッスン』講談社（学術文庫）、2015年、p.15
- ⁷ 納富（2020年）、p.60
- ⁸ 納富（2020年、pp.60-64）は、対話が「真理に向けた」真摯な活動である必要を強調しているが、それはその姿勢がそれぞれの思い込みからじぶんを解放し、対話を新しい考えや発見に開かれたものとし、創造するためである。合意や理解は対話における理想であるが、かならずしも、合意に至らなくても対話には意味があるということである。
- ⁹ 山田、p.23
- ¹⁰ この竹之内の「対話」理解は、本稿と並行して執筆されている以下の論文の3節「デスクカフェと死生学カフェ——「会話」と「対話」

- の可能性」にて公表される予定である。竹之内裕文「死生を支え合うコミュニティの思想的拠り所 ——手がかりとしての「対話」と「コンパッション」——」（『現代宗教 2022』、国際宗教研究所、2022年3月刊行予定）。
- ¹¹ ここで言う「開かれた」は「社会に対して開かれた」という公共（Public）の意味であり、「オープンダイアログ」（cf. 井庭崇、長井雅史『対話のことば オープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得』丸善出版、2021年）の「オープン」とは区別されたい。「オープンダイアログ」は、メンバーではなく話題が開かれていて本人（たとえば被治療者）の話したいことが「自由に」「そのままの言葉」で語られることを重視するアプローチで、本稿で扱う「対話」にも強い親近性を持つが、ひとまず概念としては区別しておく必要があるだろう。
- ¹² 田中伸司「哲学における対話の意義」（『文化と哲学』34、静岡哲学会、2017年、pp.35-51）、pp.42-46。ただし田中は、プラトンの対話篇の提示するソクラテスの対話的实践は、ソクラテスの死が示すような大きな危険を伴って魂を「向け変え」ようとするものであり、「楽しかった」「ためになった」を求めて安易に真似るべきものではないと警告している（p.48）。
- ¹³ ハンナ・アーレント『人間の条件』、筑摩書房 1958=1994年、p.75、pp.286-291、p.320
- ¹⁴ アーレントの「公共空間」とハーバーマスの「公共圏」の詳しい対比と検討については、齊藤順一の『公共性』（岩波書店、2000年）や『政治と複数性』（岩波書店、2008年）を参照。現代の多文化主義や共同体主義、承認の政治などの論点を念頭に置いて、有力な解釈と評価がなされている。
- ¹⁵ コーヒーハウスがジャーナリズムの発達に話した役割については、小林章夫『コーヒーハウス 18世紀ロンドン、都市の生活史』（講談社、2000年：初版は1984年、駸々堂）を参照。
- ¹⁶ ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換』未来社、1990=1994年（第2版）、p.13、p.52
- ¹⁷ 齊藤（2008）p.35、あるいは篠原一『市民の政治学 ——討議デモクラシーとは何か——』岩波書店、2004年など。
- ¹⁸ マルク・ソーテ『ソクラテスのカフェ』紀伊国屋書店、1995=1996年
- ¹⁹ 斎藤（2000年）pp.37-38、（2008年）p.33
- ²⁰ Groce, Nancy. Coffeehouses: Folk Music, Culture, and Counterculture, 11 Apr. 2014, Montpelier Room, James Madison Building, Library of Congress. Opening Remarks.
<https://blogs.loc.gov/folklife/2014/04/coffeehouses-folk-music-culture-and-counterculture/>（2021年10月24日取得）
- ²¹ トクヴィル『アメリカのデモクラシー（上／下）』岩波書店、1835=2005年
- ²² レイ・オルデンバーグ『サードプレイス』みすず書房、1989=2013年
- ²³ オルデンバーグ（2013年）が当時のコーヒーハウスにおける核心をついた「会話のルール」として紹介されているものを見ると、他者の嫌な話題を避け、会話を独占したり、遮ったりしない、という趣旨であり、テーマについて真摯に語り合い理解を深めるという公共的な対話よりもむしろ、共同性における快適な関係を志向していることが感じられる。
- ²⁴ Detail from the 1942 U.S. Government photograph by Marjory Collins, “New York, New York. Italian-American cafe espresso shop on MacDougal Street where coffee and soft drinks are sold. The coffee machine cost one thousand dollars.”
from ‘Coffeehouses: Folk Music, Culture, and Counterculture’ Stephen Winick, April 17, 2014
<https://blogs.loc.gov/folklife/2014/04/coffeehouses-folk-music-culture-and-counterculture/>（2021年10月24日取得）
- ²⁵ ジョン・スチュアート・ミル『自由論』光文

- 社、1859=2006年
- ²⁶Abumrad, J. (Host) (2021, 4, 2). What Up Holmes. [Audio podcast episode.]. In RadioLab. WNYC Studios. <https://www.wnycstudios.org/podcasts/radiolab/articles/what-holmes>
- あるいは、大谷卓史(2017)「過去からのメディア論 「言論の自由市場」再論」(『情報管理』Vol. 59、国立研究開発法人 科学技術振興機構、pp. 699-701
- ²⁷Zamora Bonilla, J. (2005) The Economics of Scientific Knowledge. Handbook of the Philosophy of Science. The Philosophy of Economics. pp. 1-36.
- ²⁸ロバート・パットナム『孤独なボーリング』柏書房、2000=2006年、p.177
- ²⁹オルデンバーク(2013年)、pp.442-446
- ³⁰"Coffee Houses and Café Society ." Encyclopedia of Recreation and Leisure in America. Retrieved September 13, 2021 from Encyclopedia.com: <https://www.encyclopedia.com/humanities/encyclopedias-almanacs-transcripts-and-maps/coffee-houses-and-cafe-society> (2021年10月24日取得)
- ³¹Ingber, S (1984). The Marketplace of Ideas: A Legitimizing Myth. Duke Law Journal. Vol. 1984:1. pp.1-91. は、権力を有した新聞がテレビチャンネルがコントロールして、メッセージを決めているという不信を指摘している。
- ³²Vosoughi, S; Roy, D.; Aral, S. (2018). The spread of true and false news online. Science. Vol. 359. pp. 1146-1151 は、Twitterでは「嘘」(フェイクニュース)の方が「事実」より早く二倍広がる」と指摘している。
- ³³インターネット空間と民主主義、公共圏の関係の歴史については、吉田純『インターネット空間の社会学』(世界思想社、2000年)が詳しいので参照されたい。
- ³⁴イーライ・パリサー『フィルターバブル』早川書房、2011=2012年(初訳は『閉じこもるインターネット グーグル・パーソナライズ・民主主義』2012年)
- ³⁵キャス・サンスティーン『インターネットは民主主義の敵か?』毎日新聞社、2001=2003年
- ³⁶荻上チキ(『ウェブ炎上 ——ネット群衆の暴走と可能性』筑摩書房、2007年)は、昨今のインターネットの日本語言論における「炎上」現象を取り上げ、サンスティーンの「集団分極化」や「デイリー・ミー」「エコーチェンバー」「サイバーカスケード」といった類似の概念で分析している。
- ³⁷サンスティーン(2003年)、pp.172-190
- ³⁸サンスティーン(2003年)、pp.201-202
- ³⁹Boghossian, P. (2013). A Manual for Creating Atheists. Pitchstone Publishing. Durham. また、中村和彦は「ファシリテーション概念の整理および歴史の変遷と今後の課題」(井上義和・牧野智和編著『ファシリテーションとは何か コミュニケーション幻想を超えて』ナカニシヤ出版、2021年、pp.93-119)において、1946年ごろからの「Tグループ」や「シカゴEI: Ecumenical Institute」などの取り組みに触れながら、アメリカにおける教育や地域コミュニティ開発、ビジネスなどの領域における「ワークショップ」と「ファシリテーション」の取り組みの発展について整理している。こうした取り組みを経て、アメリカでは1990年頃から、日本でも2000年ごろから、「ワークショップ」等において意識的に「対話の手法」が試みられるようになってきたと中村は指摘している(p.105)。
- ⁴⁰Glouberman, M. & Heti, S. (2011) The Chairs Are Where People Go: How to live, work, and play in the city. Farrar, Straus, and Giroux, New York.
- ⁴¹斎藤幸平『人新生の「資本論」』、集英社、2020年、p.275
- ⁴²例えば、斎藤純一は『公共性』(岩波書店、2000年)において、「言説の資源」に恵まれていないメンバーが排除される可能性を「公共性へのアクセス」の問題として整理してい

る (pp.8-13)。

- ⁴³ 世代をまたぐ「対話」によって分断を乗り越えコミュニティ形成を試みている事例として以下の研究がある。

Lisa Wexler, "Intergenerational Dialogue Exchange and Action: Introducing a Community Based Participatory Approach to Connect Youth, Adults and Elders in an Alaskan Native Community", *International Journal of Qualitative Methods*, International Institute for Qualitative Methodology(University of Alberta), 2011.

- ⁴⁴ 「2030 松崎プロジェクト」ホームページ (「静岡大学未来社会デザイン機構」) <https://future.shizuoka.ac.jp/> (2022 年 3 月 10 日取得)

- ⁴⁵ 「2030 松崎プロジェクト」の活動全体については、静岡大学『地域創造教育研究』の第 3 号 (2021 年) に簡易の報告が掲載される見込みであり、2022 年度には「静岡大学未来社会デザイン機構」のまとまった活動報告が公表される予定で編集作業が進んでいるのでそちらを参照されたい。

- ⁴⁶ イスの配置やワークショップ会場の作り方、ファシリテーションの心得などについては、プロジェクトとワークショップを中心となって設計した竹之内が以前から取り組んできた哲学カフェや哲学塾、死生学カフェなどの経験、そして中野民夫『学び合う場の作り方 本当の学びへのファシリテーション』(岩波書店、2017 年)などを参考に、目的や状況に合わせて柔軟にセッティングした。

- ⁴⁷ 竹之内裕文『死とともに生きることを学ぶ 死すべきものたちの哲学』ポラーノ出版、2019 年

- ⁴⁸ 竹之内裕文「対話を通して生と死を探究する——死生学カフェの朝鮮」(『文化と哲学』37 号、静岡哲学会、2020 年、pp.31-69)

- ⁴⁹ 竹之内 (2020 年)、p.60

- ⁵⁰ 松崎町ホームページ「松崎町からのお知らせ 2016 年 02 月 05 日」

<https://www.town.matsuzaki.shizuoka.jp/>

docs/2016020500299/(2021 年 10 月 25 日取得)

- ⁵¹ 社会の成員相互の信頼関係が「ソーシャルキャピタル」として社会づくりにプラスに働くことをしてきたものに、ロバート・パトナム『哲学する民主主義』NTT 出版株式会社、1993=2001 年 -

- ⁵² 竹之内 (2020 年)、p.58